

アメリカ合衆国とアフリカ系アメリカ人(1)

— 「見えない人間」と「盲人」 —

The U. S. A. and Afro-Americans (1)

(1994年4月8日受理)

君塚 淳一
Jun'ichi Kimizuka

Key words : 見えない人間, 盲人, 解放

はじめに

アメリカ合衆国において、『奴隷解放宣言』後もアフリカ系アメリカ人¹（アメリカ黒人）に対する人種差別が止むことがなかったことは周知の事実である。こと南部では1895年のプレッシー対フォークス判決によって「分離すれど平等」が認められると、それを受けて成立した「人種隔離法」が様々な形での差別を容認することになる。これは1950年代半ばにその導火線に点火され、60年代にスパークする黒人公民権運動で制度的にはいちおうの解決を見る。しかし、そこまで行き着く苦難の道は、白人と黒人の間に存在する「奴隷文化」が形作った深き心の溝をおのずと物語る。また、この「奴隷文化」がいくら「過去の遺物」ではあっても、一時期でも成立してしまっていたという事実が60年代を経験したにもかかわらず、いまだに両人種の古傷を繰返し化膿させ、合衆国を苦しませているのである。当然、問題は南部に限ったことではない。北部へ移住した黒人たちを待ち構えていたのは決して天国ではなく、プランテーションのマスターに代わって彼らを搾取し労働者の底辺においやる、目に見えぬ白人資本主義体制だったことは紛れもない事実であった。小論は、合衆国における黒人と白人の問題を「見えない人間」と「盲人」という点から捉え、文学をとおして時代や地域がいかに描かれ、且、合衆国の人種問題解決と関わってくるかを考察するものである。

I

トーマス・L・ウェッバーは『奴隷文化の誕生』（1978）の中で奴隷制度下における黒人の白人観を以下のように分析している。

奴隷移住区共同体の成員は自分が白人より道徳的に優っているだけでなく、行動のレベルにおいても優っていると考えた。（中略）大部分の奴隷は自分が有能で、勤勉な働き者だと思っていたが、白人は一般的に、怠惰で、無能で、鋤や鋤を使うこともできず、太陽の下で働いたり、料理をしたり、洗濯をすることもできない人間だと考えた。（中略）彼らのために働く黒人がいなかったら、ほとん

どの白人はプランテーションから利益をあげることはできなかつただろう。²

つまり、黒人たちは自分の身の回りのことだけでなく、主人のあらゆる世話もすることができるが、白人たちは自分のことすらできないという軽蔑が白人を「見る」黒人奴隷の中に備わっていたというのである。ウェッバーは梅毒を病んだ黒人に対して老いた別の黒人が「あいつは白人のように病んでいる」という表現を使っている例を上げ、また料理から子守まですべてを黒人女性に任せる白人女性の無能さなども実例やインタビューを駆使して力説している。しかしながら実際、奴隷時代そして解放後の南部においての白人に対する黒人たちの態度はどうかといえば、当然このような感情を表に出すことはない。南部の人種関係の中で、白人を侮辱する行為が何を意味するか充分承知しているからだ。奴隷商人たちはかつて彼らを教育する上で「黒い肌の色は退廃の印」であることを強調し、白人側もその論を以て「黒人の人種の劣等性」を受入れ、見下していたことは確かに事実であろう。そして黒人側からすれば、南部の社会機構で生き抜くためにこの役を演じることになるのである。したがってリンカーンによる奴隷解放後も、こと南部においては従来から存在する「黒人の人種の劣等性」信仰と、更に「北部に大敗した劣等意識のいわば補償」であるかのように、南部白人の優位性保持の歪んだ形としてもこの「黒人劣等伝説」は彼ら南部白人の感情に変わらず存在し続けているのである。

それゆえ奴隷解放宣言の後、南部では白人優越主義を掲げる様々な結社が設立され、自由に振舞う黒人に対してはリンチ（私刑）を行い、あくまで自分たちの優位性保持に懸命になる。白人にとっても黒人と自分たちの同等性を感じる者もいただろうが、黒人を認めることは自分たちを彼らの地位まで落とすものと言わんばかりに抵抗する。その点からも、白人たちが奴隷時代からのステレオタイプ化した黒人像を自身にも植え付け、また人種隔離政策によって目に見える形で自分たちの優位性を体験しようとしたのである。南部白人たちが1954年に連邦政府による「公立学校における人種隔離政策は違憲」判決が出てもあくまでも「南部宣言」によって抵抗の意志を表明したのは、恐らく共学により無垢な子供たちが両人種の同等を感じとってしまうからとも考えられるのである。それが「下位の人種との共学では白人のレヴェルが下がる」ことや「黒人は動物同然だから何をしでかすかわからない」よりもずっと南部白人の親にとっては『危険』視されるものであったのだろう。

そして結局は当然のことながら、黒人たちは保身のため「奴隷文化」が生み出した『白人が望む黒人の役』を演じることになる。つまり、これは彼ら黒人から言わせれば、「怠惰で無能な白人」はそれが黒人本来の姿であると信じ込んでいることになる。この愚かな『だまし合い』は「白人は黒人劣等という偏見を信じ込もう」とし、一方「黒人は白人たちの無能さを笑いつつも自分は、彼らに素直に服従する態度」をとるものである。

W. H. グリアーとP. M. コップズは『黒い怒り』（1968）の中で「奴隷文化は奴隷主人と奴隷双方にいまでもつきまとって離れないでいるのだ。奴隷制度を黙認した文明は奴隷を覆ったマントを脱いだが、感情は依然として消えぬままだ」と記している。まさに、こと公民権運動前の南部では、白人は黒人の真なる姿を敢えて「見ない」ように努力し、黒人は真なる姿が「見えない」ようにしているのである。これこそ「奴隷文化」が作った深き心の溝なのである。

II

さて、この黒人と白人の「深き心の溝」は黒人文学に於いてはどう描かれているのであろうか。深南部ミシシッピー出身の代表的な黒人作家 Richard Wright (1908-60) は巧妙にこの心理状況を作品に入れ、アメリカの南部と北部における人種問題の根源を明示する。彼の代表作とされている *Native Son* (1940) はこれまでプロタゴニストである Bigger Thomas の『犯罪』と『白人中心のアメリカ社会』に焦点が置かれ、Wright の訴えは Bigger の責任が全てアメリカ社会にあることを示唆する抗議小説であると批評家筋では類別されてきた。しかし、それも Bigger という「中心」だけにとらわれず、「周辺」の人間に目を転じてゆくことでこの小説の捉え方も変わってくる。言うまでもなくこの作品で「周辺」を演じているのは「Dolton一家」と「Biggerの一家」そしてコミュニズムの立場から黒人側の救済を試みる Jan とユダヤ人弁護士の Max である。

シカゴのスラムに住む黒人青年 Bigger Thomas が金持ちの白人実業家 Dolton 家の雇われ運転手になり、娘の Mary を大学まで送るよう頼まれる。しかし、彼は彼女は大学ではなくコミュニスト仲間の Jan と会い 3 人で黒人街で食事を共にさせられる。Bigger は白人でありながら黒人である自分を同等に扱う彼らにとまどい、逆に不快感を感じる。その後、途中で Jan を降ろし彼は Mary を家まで送る。しかし、泥酔した彼女は独りで部屋まで行けず、(伝統的な人種のルールでは) 黒人がすべき行為ではないと思いつつも仕方なく彼女を抱きかかえて部屋まで連れてゆく。しかし、ベッドに彼女を横にすると物音に気づいた夫人が部屋へ見に来る。彼は彼女が盲目であることを知っていながら、黒人である自分が人種の法を犯している恐怖に怯え、母親の呼び掛けに答えられぬよう Mary に枕を押し付け、結果彼女を窒息死させてしまう。これが小説において事件の発端として Wright が設定したものである。

この殺害へ Bigger を導いたものが、彼の「黒人としての行為を越えた振舞いからくる恐怖」であり、殺人の罪を負うべきなのはこの心理的抑圧を彼に与え続けてきた歪曲したアメリカ社会であることは、改めてここで指摘するまでもない。ここで取上げたい点はまず作品中の Mary の存在である。Wright は Bigger の Mary 殺害が偶然であったにもかかわらず、弁護士 Max との対話中で Bigger に「Mary を憎んでいた」と作品終局で発言させるが、その理由として

“Bigger, you should have tried to understand, She was acting toward you only as she knew how.”...

“Well, I acted toward her only as I know how. She was rich. She and her kind own the earth. She and her kind say black folks are dogs. They don’t let you do nothing but what they want...”

“Aw, I don’t know, Mr. Max. White folks and black folks is strangers. We don’t know what each other is thinking. Maybe she was trying to be kind; but she didn’t act like it. To me she looked and acted like all other white folks...”⁴

と彼女に対して「自分がどう振舞って良いのかわからなかった」と苦々しく語らせる。Bigger が言うように彼にとっては「白人は皆誰も白人」、つまりアメリカ黒人の歴史上、彼の祖先を私刑に処し、南部で起きた暴動の際には彼の父親を殺した白人なのである。それは Mary に対しても例外ではない。彼は Jan に運転を強引に交替させられ「後部座席で彼女の隣に座らせられた時」、「3 人で無理やり黒人街で食事に誘われた時」、「泥酔状態の彼女を抱えて部屋へ行かねばならなかった時」には枕を押し付けられた

Mary 自身と同様、窒息寸前だったに違いない。白人と黒人は「互いに知らぬ者同士」、接触する際は『伝統的な人種ルール』によってのみ成立する関係であった。しかし人間的に接しようとしたにもかかわらず、そのルールのバランスを崩しただけにとどまった Mary も Jan も結果的に Bigger を混乱させたにすぎなかったのである。しかしながら、スラムで黒人らしく「陽の当たらぬ陰で生きてきた」Bigger にとっては、「常に陽の当たる場所にいる」白人と対等に関わることは彼の心中では危険信号を発していたに違いない。

中でも Dolton 夫人は夫の Dolton 氏と対比することで作家 Wright の意図がはっきりと浮かびあがってくる。まず、Dolton 氏はサウスサイド土地会社の社長として Bigger の一家が住むシカゴの「ドブネズミが走り回る」スラム街のアパートを所有している。(全ては作品の終局で読者には知らされる) Dolton 氏にとっての Bigger の存在とは、Dolton 氏が「見て見ぬ振りを決め込む」ところのスラムに居住する黒人であった。しかしながら、それが偶然自分の目の前に現れ、夫婦揃って (Bigger に言わせれば「黒人を知らぬくせに」) 黒人に理解ある顔をする。しかし Wright は Bigger が Dolton 夫妻との面接の際、「伝統的な人種ルール」が生む滑稽な状況を皮肉たっぷりに描写する。Bigger は白人が黒人である自分に望んでいるだろう態度を間違いなく演じようとする。

He stood with his knees slightly bent, his lips partly open, his shoulders stooped ; and his eyes held a look that went only to the surface of things. There was an organic conviction in him that this was the way white folks wanted him to be when in their presence. ⁵

またその一方で Dolton 氏は彼にまさに「アメリカの人種問題が犯される」滑稽な質問をする。Dolton 氏は Bigger がかつて盗みに関わったことで感化院に送られたことを心配して “If you had a job, would you steal?”⁶ と彼に真顔で尋ねる。これと同様な設定が Wright の自伝的小説 *Black Boy* (1945) でも描かれているが、そこでのリチャードはついその質問に吹出して、相手の白人女性を怒らせてしまう。そして彼は以下のように結論づけている。

Then I recalled hearing that white people looked upon Negroes as a variety of children, . . . If I had been planning to murder her, I certainly would not have told her, I certainly, she no doubt realized it. Yet habit had overcome her rationality and had made her ask me : Boy, do you steal ?” Only an idiot would have answered : Yes, ma’ ma. I steal. ”⁷

Dolton 氏は黒人たちに善意を以て接し、物質的援助を施していることを広言する。しかし、娘の Mary が Bigger に殺害されたことを聞くと恩を仇で返されたように彼は黒人を非難する。彼も言うまでもなく自ら真の「黒人の状況」に目をつぶる白人であるが、夫人は更にそれが強調され、「盲目」の設定がされていることは大いに注目すべき点であろう。そして夫同様に彼女も「教育を受けさせること」のみが黒人にとっての向上と信じて疑わず、Bigger に対してもそれを執拗に勧める。そして Bigger による Mary 殺害のきっかけを作る役も彼女に設定されている点には当然 Wright の皮肉が込められていることはいままでもない。Bigger によって初対面の時から「白髪」「透通るような白い肌」と『白』が強調されていた夫人だが、Mary と共に部屋にいた Bigger の目に映った彼女は「白いガウン」を羽織ったま

さに亡霊のように描写される。つまり彼は、いや黒人はアメリカに於ける苦悩の歴史の中でこの「盲目（黒人の真の姿が見えない）の白い亡霊」に悩まされ続けているのである。Wright は彼の *Black Boy* の中で

The white South said that it knew “niggers” and I was the white South called a “nigger.” Well, the white South had never known me—never known what I thought, what I felt.⁸

と述べているが、これこそが Wright が真に描き出したい「白人像」であると思える。また、その一方で彼はこの自身の少年時代をモデルとしたリチャードに、また南部を舞台とする作品の黒人のプロタゴニストに「南部における人種のルール」を無垢な気持ちから破る性格づけをしている。⁹が、それは実際、Bigger Thomas の対極に位置する「自分を人種のルールによって偽らずに生きようとする Wright 自身が望む「黒人像」でもあるのだ。

III

黒人を敢えて見ようとしないう白人が *Native Son* においては Dolton 夫妻という2種類の形式で設定されているのは大変興味深いことである。また、Bigger があくまでも「黒人らしく」、人種のルールに従って行動すること（白人と対等ではなく、目立たず「見えない人間」となる）を望んでいたことも理解できるだろう。Wright 自身、アメリカ南部そして北部を経てパリへ移住したことは皆の知るところだが、*Black Boy* 以来の長編を1953年 *The Outsider* を書き上げる。これはまさに *Black Boy* の Richard とは対極の Bigger を更に拡大して描かれている。つまりプロタゴニストの Cross Daymon は地下鉄事故により、生きながらにして死者となる。これはもちろん、自己主張を押えて「目立たぬように」生きる黒人と重なり合うのである。しかし知り合いの Joe Thomas に自分が生きていることがわかってしまうと、彼は自分が生きていることを話されては困ると Joe を殺害してしまう。これはちょうど Bigger の自分が「黒人としての行為」から外れているため、自身を危険にさらす Mary を偶然ではあっても殺してしまう展開と完全に繋がる。Cross の場合は結果的に本当の死が彼に訪れることになるのだが、また蘇生することをその後望むのである。

1952年に出版された Ralph Ellison (1914—) の *Invisible Man* はこれまで考察してきた「見えない人間」そのものとして黒人像が描かれる。そして Ellison 自身も作品冒頭で

I am an invisible man... I am invisible, understand, simply because people refuse to see me... Nor is my invisibility exactly a matter of a bio-chemical accident to my epidermis. That invisibility to which I refer occurs because of a peculiar disposition of the eyes of those with whom I come in contact.¹⁰

と「見えない」のは相手（白人）の目がおかしいからだとしているように、真の黒人の姿を見ようとしないう白人の『盲目性』を作品で描こうとしているに他ならない。また当然、プロタゴニストである「ぼく」も作品終局ではアイデンティティに目覚め、自ら「見えない人間」であることから離脱するが、そ

れまではその状況に甘んじているよう描かれている。この作品は南部、北部そして時代を超越してアメリカ黒人の歴史が総括されているダイナミックなものである。しかし、Wright の作品同様「見えない人間」を装う黒人と「見ようとしぬ盲目」の白人は「ぼく」の「周辺」にも散りばめられている。奴隷であった彼の祖父がする『南部黒人として生残る哲学』は、まさに「心では白人を馬鹿にするが表面はアンクル・トムを装う」というもの。この「装う」行為が *Invisible Man* においては黒人側で「目隠し」や「盲目」という形で強調される。大学で見た銅像は奴隷出身の創立者が奴隷の目から目隠しを外そうとしているものだが、Edward Margolies の指摘を待つまでもなく「目隠しをしようとしている」ようにも取れるのである。そしてこの創始者を賛美する老いた黒人牧師自身も実は盲目であったことを「ぼく」は彼が講演を終え、演壇から降りる時に知るのである。

その一方、大学の理事である白人銀行家 Norton 氏を誤って黒人街に連れていってしまうエピソードは Dolton 氏ほど偽善的ではないにしろ、金銭的援助はするものの「黒人の真の姿を見ない」白人の姿が Wright 同様に描かれていると言えよう。「ぼく」は北部での様々な経験の後ボイラーの爆発により記憶喪失になるが、これは黒人として自覚を持ち「アメリカ黒人の権利闘争」への新たな契機を「ぼく」に与えることになる。団員間のトラブルの後「ぼく」は偶然、現在の地下室の住まいに1369個の電球を盗電してつけ、「冬眠」することになったのである。Ellison は物語終局で「ぼく」を冬眠から目覚めて歩み出す設定にし、最後に“Who knows but that, on the lower frequencies, I speak for you?”と「ぼく」に語らせる。Wright 同様、Ellison も『人種間の問題』を「見えない人間」と「盲人」という角度から定義していると言えるだろう。

IV

これまで考察してきたとおり「人種問題」の根源はまず、『奴隷制度』まで遡る「両人種に備わったステレオタイプ」に求められる。そしてこのステレオタイプ化した人種像が両人種を「互いに知らぬ者同士」にし、更に人種憎悪を伴ってこと南部においては「人種隔離法」を成立させたことは既に論じたところである。また、生活レベルにおいては、「黒人らしい」行動はパタン化されそれに外れる「人間らしい」行為は常に危険を伴うことになりかねない。それは Richard Wright の南部を舞台とした作品では「人種間のルールに無知な」黒人少年が白人と同等に振舞うことで、身の危険を感じ南部脱出をするパタンは数多くある。また、実際に1955年に起きた「エメット・ティル少年事件」は北部生れだったがために知らずと振舞った行為によって黒人少年が白人2人に殺害され川に投げ込まれた。当然、南部白人法廷は2人を無罪にし、その後この2人はジャーナリストに何のためらいもなく、殺害の真相を告白する。James Baldwin (1924-87) はその事件を *Blues for Mr. Charlie* (1964) で戯曲化するが「装わない黒人」の悲劇として、また Wright の描く黒人少年たちの脱出しないケースの運命をも感じさせる。

また、Ralph Ellison と Richard Wright の交流はよく知られていることだが、「白人の盲目性」と「見えない人間を演じる黒人」という角度より *Native Son* と *Invisible Man* を比較する際、彼らが求めるテーマがより近いこともわかる。

「人種問題解決」への闘争は『歴史』を抹殺するしか方法はないのであろうか？制度としての解決は60年代の公民権運動でかなりの成果を上げた。しかし、実体を見ようとせずに『盲目』を決め込む者へ

の意識改革は未だに必要と思われる。

Notes

- 1 時代性を考慮して本論では「(アメリカ) 黒人」という総称を用いる。
- 2 トーマス・L・ウェッバー. 西川進監訳, 『奴隷文化の誕生』(東京: 新評論, 1992) pp. 160-61.
- 3 William H. Grier & Price M. Cobbs, *Black Rage* (New York: Basic Books, 1980) p. 26.
- 4 Richard Wright, *Native Son* (New York: Harper & Row, Publishers, 1966), p. 324.
- 5 Ibid., p. 50.
- 6 Ibid., p. 52.
- 7 Richard Wright, *Black Boy* (New York: Harper & Row, Publishers, 1966), p. 161.
- 8 Ibid., p. 283.
- 9 君塚淳一, 「イノセンス, 反逆精神そして神話—マイケル・ゴールドとライトの接点」『黒人研究』57号, 1987年を参照.
- 10 Ralph Ellison, *Invisible Man* (New York: A Signet Book, 1952) p. 503.

Bibliography

- Coombs, Norman. *The Black Experience in America*. New York: Twaine Publishers, Inc., 1972.
- Ellison, Ralph. *Going to the Territory*. New York: Vintage Books, 1986.
- King, Jr., Martin Luther. *Where Do We Go from Here?*. Boston: Beacon Press, 1968.
- 中島和子. 『黒人の政治参加と第三世紀アメリカの出発』. 東京: 中央大学出版部, 1989.
- Margolies, Edward. *Native Sons*. New York: J. B. Lippincott Company, 1968.
- Wright, Richard. *The Long Dream*, New Jersey: The Chatham Bookseller, 1969.
- _____. *The Outsider*, New York: Harper & Row, Publishers, 1965.